

notice **サイクリングで出会う、新しい札幌の魅力**
ピクニックライド参加者募集

「ピクニックライド・さっぽろ」では、地元詳しいガイドがその街の知られざる新たな魅力をお伝えする観光サイクリングをご提供しています。ただいま、2018年のツアー参加者を募集中!!ピクニックに出かける感覚で、気軽に、楽しく、のんびりと。そんなワクワクの気持ちと一緒にいろいろな街をサイクリングしてみませんか?



現在募集中のツアー

- 6/23 (土) **札幌街中 札幌スタイルツアー** 12:00-16:00
- 7/1 (日) **恵庭 オープンガーデンツアー** 10:00-15:30
- 7/4 (水) **北広島 いちご狩りツアー** 10:00-15:30
- 7/21 (土) **当別 小麦づくしツアー** 10:00-16:00

※定員になり次第締め切らせていただきます。ご了承ください。

お申込み・お問い合わせ: さっぽろサイクルラボ 事務局

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2-17セントラル札幌北ビル4F (一社)シーニックバイウェイ支援センター内

[受付時間] 9:00~18:00(土・日・祝を除く)

[お申込み] E-mail: picnic@sapporocyclelabo.jp FAX: 011-708-0430

[お問い合わせ] URL: <http://www.sapporocyclelabo.jp> TEL: 011-708-0429

notice **第12回 寒地開発に関する国際シンポジウム**
ISCORD 2019開催のご案内

テーマ: 寒地における持続可能な資源管理 (Sustainable Resources Management in Cold Regions)

第12回ISCORDが、2019年6月17日(月)~19日(水)の期間、フィンランド オウル市で開催されます。

以下は論文提出関連の予定です。詳細については、追ってdecマンスリーでお知らせいたします。

- ◆論文概要提出締切: 2018年10月 1日(月)
- ◆本論文提出締切: 2019年 2月 4日(月)
- ◆概要審査結果通知: 2018年11月14日(水)
- ◆本論文審査結果通知: 2019年 3月20日(水)
- ◆論文発表者登録締切: 2019年 4月30日(火)

お問合せ:

[国内] ISCORD事務局 北海道大学大学院工学研究科 E-mail: iscord@eng.hokudai.ac.jp

または(一社)北海道開発技術センター 調査研究部(担当:佐賀) TEL:011-738-3364 FAX:011-738-1890

[現地窓口](英語対応のみ)オウル大学 Prof. Riitta Kamula, D.Sc.(Tech) E-mail: Riitta.Kamula@oulu.fi

[ISCORD 2019ウェブサイト] URL: <http://www.ril.fi/en/events/iscord-2019.html>

編集後記

先日、何十年ぶりで映画を見てきました。若い頃は良く映画を見に行っていたなあ...なんて感慨深げにシートへ着席...が、空いていた席は前の方。目線を上げて見なければいけない位置で、首は痛い、肩は凝るわで散々な目に...おまけに一緒に行っていた子どもたちはポップコーンをどちらが多く食べたか否かで揉める始末...まるでお菓子を買い与えていないかのようなポップコーンへの情熱に、腹立たしいわ、恥ずかしいわ(泣)...でも、何十年ぶりで見た映画はとっても笑えて泣けるいい作品でした。さて、今回は、「地域と教育を元気にするフォーラム2018」を特集しました。特別講演では、学校教育における社会科教育の重要性、土木を含めた様々な方が連携して取り組むことの必要性などを藤井先生に熱く語っていただきました。その他、盛りだくさんの内容でお届けいたします!(RW)

dec monthly vol.392

2018年5月1日発行

発行人 山口 登美男

発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL(011)738-336 FAX(011)738-1889 URL <http://www.decnec.or.jp/> E-mail dec_int001@decnec.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly
2018.5.1 vol.392 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)
dec地域政策研究セミナー
「地域と教育を元気にするフォーラム2018」

dec Interview >>> ノンフィクション・ライター、編集者 **北室 かず子 氏**

この地が「北海道」と命名されて150年。その歩みに秘められた幾多の物語を、独自の視点と丹念な取材で発掘し、北海道の深くで新しい魅力を発信してこられた北室かず子さん。その定評ある筆力はJR北海道車内広報誌の巻頭特集でもおなじみです。あらためて北海道の魅力についてうかがいました。

ご著書『赤れんが庁舎物語』は、北海道命名150年を機に改訂版が刊行され、英語による抄訳がウェブ公開(一財・北海道文化財保護協会HP)されるなど、ますますのご活躍です。まず、「北海道」を発信する書き手としての出発点についてお聞かせください。

大学時代の専攻はフランスの現代思想で、婦人画報社に就職し、女性月刊誌の編集者として映画や音楽など文化関係を担当していました。1991年に北海道に移り住み、同年からJR北海道の車内広報誌『THE JR Hokkaido』の仕事させていただいています。建築や土木、農業など理系についての知識は全く無し。結婚を機に北海道に来てから、その未知の世界に飛び込みましたが、取材を通じて各専門分野の方々に直接、教えていただいたことが、とてもありがたかったです。

道内を歩き回って面白いと思うのは、北海道では明治以降の近代技術導入による社会資本整備の様子がありありと見える、とてもわかりやすい、ということ。本州では藩政による治水事業など近世以前にインフラ整備的取り組みがたくさん

ありますが、北海道では明治に入って一気に国家レベルの大規模な開発が進められ、社会基盤の成り立ちが本州と大きく違う。国家事業だけに保存された史料も多く、それらを目のあたりにすると、欧米の近代科学が技術として実地に応用されていく、まさにその画期に北海道の開発の幕開けがあったことを実感します。

では具体的に、北海道の社会資本整備に関して特に印象深い事象や人物とは。

北海道の田園風景を見て、よく「自然が素晴らしい」と言われたりするのですが、田園地帯の地下には排水のための暗渠が張り巡らされているのであり、これは自然ではなく人工の景観。緑の田園は先人が営々と農業土木による土地改良を行ってきた結果だと知ると感激します。そして北大の大学図書館で、札幌農学校で教鞭をとったウィリアム・ベン・ブルックスが暗渠排水用の土管を試作したという工場の史料を見ると「始まりはこれだったんだ」と嬉しくなる。

小樽築港をはじめ港湾事業で多大な功績を残した廣井勇は、小樽の北防波堤建造のため、当時の最先端素材コンクリートを選びました。お雇い外国人の指導で築造された横浜港の防波堤が損傷するなか、廣井は波力の算定法、セメント・砂利・石の配合比率、効率的な工事方法まで考え出したのです。現代なら理学から工学にまたがるマルチ才能ではないかと、感激します。北防波堤は竣工から110年経つ今も荒波から小樽港を守っています。

お雇い外国人が近代的な技術や思想を導入した後、日本人は北海道の社会資本整備にどう向き合ってきたのか。そこを物語として読み解き、伝えていきたいですね。

dec Interview

きたむろ かずこ

1962年徳島県生まれ。筑波大学第二学群比較文化学類卒業後、婦人画報社で女性月刊誌編集に携わる。91年に北海道移住し、JR北海道車内広報誌はじめ新聞・雑誌・書籍執筆のため道内各地を取材。著書に『赤れんが庁舎物語』(一財・北海道北方博物館交流協会)、『いとしの大衆堂』(北海道新聞社)、『学校では教えない日本地図の不思議発見100』(講談社)、『川は生きている—川の文化と科学』(ウエッジ選書)ほか。(一財)北海道文化財保護協会評議員。

コンクリートは反人間的だ、などと言われますが、人間が地域を守るために懸命に生み出したものなのですね。

他に、治水関連では石狩川の治水計画に携わった岡崎文吉。橋梁では旭橋(旭川市)を設計した吉町太郎一。北海幹線用水路開削に携わった農業用水の功労者に友成伸(ともなり・なか)と平賀栄治。道路関係では永山在兼(ながやま・ありかね)という道東の道路建設を牽引した人がいます。難工事だった阿寒横断道路を開通させ、阿寒国立公園(2017年より阿寒摩周国立公園)誕生につなげました。早い時期に道東観光ルートの可能性を見通した功労者だと思えます。

ダムや橋梁など公共建造物を観光資源とする「インフラツーリズム」は、今後、北海道にとって大きな強みになりそうですね。

インフラツーリズムや産業遺産は大変興味のある分野ですね。特に、近代のしくみや近代意識とは何だったか、間近に感じとれるところが北海道の面白さだと思うのです。

例えば、私が「博物館網走監獄」を訪れたのは北海道に移って間もないころでしたが、「五翼放射状平屋舎房」という施設を見て、「現代思想が解明した近代のかたちが北海道にあったのだ」と大変、驚きました。これは放射状に監房があって中央の監視する場所からぐるりと全体を見渡せる刑務施設。少ない監視者で効率的に多数の収容者を監視できる「パノプティコン」と呼ばれるしくみが、そこに現れます。これは19世紀フランスの監獄建築などに見られますが、フランスの哲学者ミシェル・フーコー(1926~1984)は、このしくみを考えついたことが近代の始まり、と指摘しました。独房に隔離され、一方的に監視されるという苦痛の与え方は、かつての鞭打ちなどの体刑とは異質の懲罰で、近代が生み出したシステムの一つであるというのです。

網走監獄をそのような視点で見るとすれば、世界中にフーコーの思想に興味を寄せる人はいるわけで、

そういう人たちにとっても網走監獄は訪れたい場所になるでしょう。

中国から爆買いに来てもらうのもいいけれど、北海道にはさまざまな知的観光の切り口があると思えます。



日高本線の車窓から見える苫小牧東港のガントリー・クレーンは、まさにサバンのキリン。インフラツーリズムのカギは驚きにある。(撮影/北室かず子)

第8期北海道総合開発計画には北海道の地域特性や個性を学ぶ「ほっかいどう学」の推進が盛り込まれ、北室さんもその内容を検討するプロジェクトチームに参加されています。

北海道についてもっと学ばれ、知られるべきだと思うのは、人間が自然と向き合い、社会基盤をつくるためにどのように取り組んだのか、ということ。年表的な知識ではなく、人の営みの具体的な物語として知ることが大事だと思っています。

北海道開拓の苦難と言えば、開拓民が木の根っこを引き抜いて開墾し、酷寒の冬を耐え忍んだ、というような話がよく聞かれるのですが、石狩川流域の多くがジョボジョボに湿った大泥炭地で、排水と客土による大規模な土地改良によって今日の穀倉地帯になったことはそれほど知られていない。土地改良というと、肥えた土壌に改良することだと思っている人も少なくないのです。いわば「地面からつくり直した」のが北海道であり、人気の道産米は品種改良の賜物であると同時に土地改良の賜物でもあるのです。そういう意味で、北海道の社会資本整備の歴史は物語としてまだまだ読み解かれていないし、伝えられていない。明治以降の大規模なインフラ整備の模様をつぶさに伝える記録写真のアーカイブを整えることも大きな意味

があると思えます。

お雇い外国人たちが近代的な技術や思想を導入して後、日本人が社会資本整備にどう向き合ってきたのか。そのところを、私自身、社会の一員としてきちんとわかりたいし、「ほっかいどう学」として学ばれる意義は大きいのではないのでしょうか。というのも、社会資本の多くは税金で整備され、その意味で誰しも社会資本の部外者ではない。社会基盤の成り立ちやそれを支える技術開発の物語を知ることが、私たちが未来の社会に対してどういう態度をとるのか、ということにつながると思えます。

例えば、お茶碗一杯のごはんをつくるためには、2リットルのペットボトル100本が必要だと知ると、水路やダムなどの構造物、それらインフラの長寿命化技術の大切さが見えてくる。そうした知識を踏まえた上で私たちは将来の選択を考えていくことが必要で、それがなく、単純に「公共事業は悪」などと言うわけにはいけません。

道内の食堂32店を巡り歩いた近著『いとしの大衆食堂』は全国紙の書評に取り上げられるなど好評です。今後のご活動について教えてください。

これからも職人的に北海道のいろいろな事象取材し、自分自身知らなかったことを掘り起こして、そこにある物語を発信していきたいと思っています。『いとしの大衆食堂』も「食堂」を入口に地域の物語を掘り起こそうとした地域史なのですね。

これまでの仕事を踏まえ、さらに追っていきたいのは『近代』とは何かというテーマ。卒論がミシェル・フーコーでしたから、近代のしくみにずっと関心を寄せてきたのですが、今、21世紀まで生きてきて、あらためて「近代」って何だったのだろうと思うのです。近代科学技術が、いかに自分たち人間の考え方やふるまい、そして社会をつくってきたのか。それを知りたいし、取材して発見したことを伝えていきたいと思っています。



開会挨拶
dec理事長 山口登美男

札幌市の雪や公共交通に関する学習の推進についてはdecもサポートさせていただいています。これらを通じ、北海道を支える人づくりにおいて学校現場の先生方との連携の重要性を痛感するところです。この催しを機に学校教育とインフラ整備に携わる方々の相互の協働・連携が進むことを祈念いたします。

話題提供

「ほっかいどう学」の更なる展開に向けて

竹原 勇一氏(国土交通省北海道開発局開発監理部 開発計画課長)

第8期北海道総合開発計画(2016年3月閣議決定)は「世界の北海道」をキャッチフレーズに「2050年を見据え、『世界水準の価値創造空間』の形成」をビジョンに掲げています。「ほっかいどう学」は、その目標の1つ「人が輝く地域社会」の主要施策「北海道価値創造力の強化に向けた多様な人材の確保・対流の促進」の取り組みとして盛り込まれ、「北海道の魅力や地理、歴史、文化、産業等を『北海道学』として、子供から大人まで幅広く学び、地域に関する理解と愛着を深める取組を促進する」とあります。このように「北海道学」が盛り込まれた経緯には、計画策定に向けた有識者会議「北海道価値創造パートナーシップ会議in網走」(2015年)における新保元康氏(当時・札幌市立発寒西小校長)の提言がありました。

「ほっかいどう学」の内容や推進方法の検討は、北海道開発局を事務局に学識経験者、教育関係者、道庁や道教委など関係機関などで構成するプロジェクトチームで進めています。学びの焦点は「北海道の地域特性や個性」で、学習内容のイメージとしては、自然、歴史・文化、環境、産業、地域づくりなどの分野別の視点の他に、それらを横串でとらえた視点として開拓に貢献した技術者などの「人」や「インフラ」などを加えています。

2017年度の取り組みは「情報発信・普及啓発」と

「教員への周知・浸透等」を重点に行いました。道開発局のホームページでの発信をはじめ、セミナー(講師:関秀志氏/17年11月)、シンポジウム(高野宏康氏の講演など/18年3月)の開催、さらに普及啓発用リーフレットを作成(18年2月末完成)。リーフレットでは「ほっかいどう学」の目的、学習内容のイメージの他、学びの素材例として、北海道開拓の大きな障害であった泥炭地をどう克服していったか、物語風に紹介しています。

また、教員の方々のネットワーク構築を目指して「札幌市社会科教育連盟・夏の学習会」(17年8月)、「北海道社会科教育研究大会・釧路大会」(同11月)において「ほっかいどう学」の概要を紹介。教員の方々対象のアンケートも実施して関心度を調査しました。

今後は、プロジェクトチームの協力を得ながら、①大学、各種学会への周知・浸透、調査研究などへの支援、②道民カレッジ講座(道教委主催)との連携、③教員への一層の周知・浸透、教材などの作成支援、に取り組みます。このような「ほっかいどう学」による人づくりの取り組みは、中長期的に北海道、日本への貢献につながるものと考えています。



dec地域政策研究セミナー 「社会の基盤と学校教育」 地域と教育を元気にするフォーラム2018

北海道総合開発計画に「ほっかいどう学」への取り組みが盛り込まれている一方、学校教育の基盤となる次期学習指導要領には「社会に開かれた教育課程」がうたわれていきます。北海道を支える人づくりにどう取り組むのか。多様な分野の参加者が合流し、最新動向や提言に耳を傾けました。

2018年2月1日/T K P札幌駅前ソラリスセンター/主催:dec、共催:土木学会「土木と学校教育会議検討小委員会」、社団法人日本モビリティイノベーション協会

地域と教育を元気にするフォーラム2018

札幌市の雪学習や交通環境学習の展開を牽引し、長年、社会科教育の刷新に尽力されてきた新保元康氏が、学校現場の実情を紹介しながら社会資本の学習の意義と関係者の連携の重要性を語りました。

■あまりに乏しい社会資本の知識

私たちはどれくらい社会資本について知っているでしょうか。福岡・博多駅前の地下鉄工事による陥没事故(2016年11月)では、道路に巨大な穴があき、その断面から下水、電気、ガスなど重要なインフラがごっそり埋設されているのが丸見えになって驚きました。この地下の様子を知らなければ「道路をつくる」ことの意味の大きさは伝わらないでしょう。さらに驚いたのは、この穴が1週間ほどで埋まったこと。これは凄い技術です。

社会資本を知るのに大石久和氏の著書(『国土学事始め』、『国土学再考』など)が大変参考になります。氏は「わが国の脆弱性」として他国との比較で多様な点を指摘しています。まず、日本は形状が長く複雑。主要部分が4つの島に分割され、つながったのは青函トンネル開通(1988年)の20世紀末。脊梁山脈が走り平野は狭く、地盤は軟弱。地震が多いのは4つのプレートの上に乗っているから。ヨーロッパは1つです。そして豪雨、豪雪も。札幌のように年間累加降雪深5mのところには200万都市があるのは世界的に特異です。こんなところに何不自由なく暮らせている凄さを私たちは認識しているでしょうか。

日勝峠は2016年8月、甚大な台風被害



を受けました。職員室でその話をしていたら、若い先生のなかで「日勝峠ってどこですか」という声があった。道内のことなのに知らないのです。復旧に向けて、被災直後、北海道開発局や関係の方々からクマを恐れつつ自転車をしょって徒歩で調査して回ったとのこと。こんな苦労も知られていないでしょう。さらに十勝の畑が被災して流され、回復には10数年を要すると言われた。これは十勝平野がもともと生産性の低い火山灰地で、営々と人の力で土壌改良されたから。沃野に回復するのも時間がかかるのです。これもあまり知られていないことです。

北海道の社会資本について知られていないことは多く、しかも北海道は

小学校で社会資本整備をどう教えるか

基調講演

新保 元康氏(札幌市立屯田小学校校長)

他県が14以上入る広さ。普通のやり方では、北海道における社会資本の大切さは伝わらない。誰かが頑張って教えるなければならないと思うのです。

■明快なスウェーデンの教科書

では、実際に小学校では社会資本についてどれくらい教えられているのか。3年生から6年生の社会科の教科書を見ますと、4年生では開発の歴史や災害などインフラに関する事項がかなり出てきます。ただし、新田開発の記述を見ても、当時の人が必死に取り組んだという熱気は伝わってこない。5年生では国土の脆弱性について学びますが、国際比較がないので、その意味が今一つわかりにくい。災害の取り組みの記述は増えていますが、例えば国交省もその観点で登場するだけ。踏み込みの足りなさを感じます。さらに6年生では政治の学習として税金の働きを学びますが、これも淡々とした印象が否めません。

一方、『スウェーデンの小学校社会科の教科書を読む』(ヨーラン・スバネリッド著・新評論)によれば、同国の教科書は日本より踏み込んだ内容です。例えば目次項目でも「多くの人が貧しかったのです」「民主制の国ではありませんでした」とはっきり書かれている。税金に関しては「給料のすべてがもらえるわけではありません」「社会サービスにはお金がかかります」と非常にわかりやすい。

日本の教科書は丁寧につくられ、文科省の検定などで質が保たれて、国際的に評価は高いのですが、逆に多くの目で見過ぎるために焦点が薄まり、肝心のポイントがわかりにくくなっているのではないかと思います。

■いま、小学校教員の現状は

現場の先生方は社会資本整備についてどう感じているのか、調査したことがあります。わが校の先生対象の簡単なアンケートですが、「日

本はダムや道路に予算をかけ過ぎだ」という意見に約半数が「そう思う」と回答。また、10年前の調査で「公共事業のイメージ」について尋ねた結果では「どちらかと言えば悪い」の回答が約6割を占めて多い。

こうした意識や価値観で先生方は教壇に立っているのですが、これは言わば「隠れたカリキュラム」です。つまり、教科書に書いていなくても、また、先生がはっきり言わなくても、子どもたちには先生の価値観が自然にじわじわと伝わって拡大再生産されていく。ですから、公共事業や社会資本整備の本来的な意味について、先生方がしっかり認識することが大事です。

しかし、働き方改革が話題になるなかで学校の先生の働き方も大変なことになっています。最近ではメディアでも問題視されていますが、わが校でも早朝出勤する先生がたくさんいます。というのも、一旦、始業時刻に教室に行くと授業が全部済むまで職員室に戻って来られないのです。給食の時間もアレルギー問題で緊張感がある。東京都調布市の小学校ではアナフィラキシー・ショックで子どもが亡くなりました。教室でじっとしてられない発達障害の症状を示す子どもの割合も小さくはありません。保護者の学校に対する見方も、昔に比べれば格段に厳しくなっている。

私の学校には745人の子どもがいますが、毎日、この手のひらに745の可愛い心臓が乗っかっているという感じがします。これを守るだけでも大変。先生方はみな同じ感覚でしょう。さらに、日本の小学校の先生は道徳も体育も、掃除まで教えるなければならない。まさに「千手観音」のように、衆生をあまねく救うぐらいの大変な仕事をしているのです。

■あの手この手で学習を届けよう

多忙で新聞を読む時間がない先生

が少なくない一方、社会資本についてもっと知りたいと思っている先生はたくさんいます。では、どのように先生に、子どもたちに社会資本に関する学習を届けたいのか。私がかかわってきた例から紹介しましょう。

雪学習ではウェブ上の教科書「北海道雪たんけん館」が開設されて20年ほどになります。雪や除雪などを楽しくて学べるしかけで、アクセスはこれまで122万以上。また、札幌市の雪対策室と連携しているのが「札幌雪学習プロジェクト」。市内小学校教員全員に冬季7回、ニュースレターを発行。雪学習に関する情報提供を支援しています。

「札幌市交通環境学習プロジェクト」でも札幌市と連携し、3年生社会科の副読本や教員向けの指導書を作成。ウェブで指導案を発信したり、研究授業もすでに28回を数えます。研究授業後の検討会では、市の都市交通課、市教委の指導主事、プロジェクトの教員チーム、授業者、校長、事務局(dec)が一同に会して授業をつくっています。これはまさに新学習指導要領が目指す「社会に開かれた教育課程」の実践であり、今後も推進していかなければと思っています。

学校で子どもたちに配布される「エコチル(こども環境情報紙)」「(株)アドバコム発行)の取り組みは素晴らしい、JR北海道の車内広報誌の北室かず子さん執筆の巻頭特集は中身が深く「北海道学」として本当に面白い。このような媒体も含め、社会資本の学習は、あの手この手で子どもに届くまでのルートを考え、発信していくことが必要だと思います。

今年元旦の新聞に、読者の投票で決まった「北海道150年の10大ニュース」が掲載されていましたが、1位は「青函トンネルの開通」。社会資本充実がどれほど大事であるか、多くの道民が感じているのだと、とても意を強くしたところでした。

地域と教育を元気にするフォーラム2018

土木学会「土木と学校教育フォーラム」(2009年から東京で開催)の地方展開の一つとしても位置づけられる今回のセミナー。このフォーラムを主催する土木学会「土木と学校教育会議検討小委員会」の委員長として議論を推進してきた藤井聡氏の力強いお話でプログラムは締めくくられました。

■社会科教育の誕生

近代主義的な学校教育、つまり、系統立ったカリキュラムで組織的な教育が行われるようになったのは、ここ100年ぐらいのことです。学校が必要になったのは、産業革命を経て社会が変わったから。地縁、血縁の共同体のなかで一人の人間が多重的な役割を果たし、独立的に生きてきたのが、分業が進んで人間は長いベルトコンベアーに部品のようにはめ込まれる社会になった。そうすると、教育も誰かがまとめてシステムティックに行う必要が出てきたのです。

そうすると「社会のなかでどうふるまうか」の前提となる社会に関する知識も学校できちんと教育しようということになりました。提案したのは米国の哲学者デューイで、彼はプラグマティズムの創始者パースの継承者。プラグマティズムは観念的なヨーロッパ哲学の桎梏を脱し、実用的、現実的に生き方を考えようとする思想運動で、パースは土木も手がけた工学者でした。デューイは米国社会を憂えて実用主義の観点から社会科教育を提唱したのです。

■社会とはにぎりめしだ

人間は協力し合うことによって地球に生き残り、社会をつくってきました。小さかった社会の規模は、産業革命以降、飛躍的に大きくなります。「社会はにぎりめしだ」という社会学者の比喩がありますが、これは米粒ならまとまらないが、ご飯粒なら粘着して一つにまとまるということ。その粘着の装置として米国で生み出されたのが社会科教育学であると言えます。日

本の場合もともと協力意識が強く、第二次大戦時には「一億総火の玉だ」というような凄みにぎりめしができて米国に挑んだり、行き過ぎだったと揶揄されることもしばしば。

ところが、今はどうか。日本はマイナス成長の衰退国家になってしまった。こんな国は世界でも珍しく、中国など新興国の伸びが著しいのはもちろん、米国など先進諸国もこの20年、国民所得を伸ばしています。ドイツは低調だが、それでもプラスの伸び。なぜ、日本だけがマイナス成長の衰退国家になったのか。これは社会科教育が機能していないから。言い換えれば、社会科教育がおにぎりをつくるのを失敗したからです。

■津軽海峡というボトルネック

特に平均所得が低くて衰退気味なのは沖縄や北海道などで、日本列島は端の方に血が回らなくて壊死しかかっている。これは社会全体で協力し合うより個人の自由が大事だ、という考え方が定着してきたからでしょう。

北海道沈滞の理由の一つは青函トンネルが1本しかなく、津軽海峡がボトルネックのままだから。ある試算では約7千億円、もう2本トンネルが通せるということですが、そうすると新幹線もフルスペックで走れ、トラックも通れて物流が変わる。北海道もアクセシビリティがしっかりすれば成長できるのです。このような北海道の課題をしっかりと認識し、処方箋を編み出し、場合によっては政治的なプロセスも活用しながら実現していく。それをやれるようにするのが社会科教育です。試験のためにひたすら年号を丸暗記するような教育では、私たちの生の実践や社会を変えることには役立たない。

■インフラの視点が未来を切り拓く

江戸初期に米の生産量が急上昇した背景には、戦国武将が石高と兵力を増強するために治水など農業土木に力を入れたからです。明治の富国強兵の根幹にも鉄道や港湾の整備がある。インフラ整備によって歴史は変わり、未来が切り開かれてきたのです。歴史や地理にインフラ整備という視点を一つ加えるだけで、われわれの未来に対する教訓は山ほど出てきます。何をしたら、われわれの暮らしは良くなり、逆に悪くなるのか。その真実を伝えるのが教育であり、社会科教育であるべきだと思います。

インフラ整備と教育

特別講演

藤井 聡氏(京都大学大学院教授「内閣官房参与」)

札幌市内から排出される温室効果ガスと家庭部門における対策除雪や雪問題

札幌市環境局環境都市推進部 環境計画課 調査担当係長 佐竹 輝洋氏
家庭部門のCO₂排出量削減には子どもたちの環境教育推進が重要です。「札幌市環境教育基本方針」に基づき、①学習プログラム作成(副教材作成等)、②機会・場づくり(コンテスト開催等)、③情報の共有・活用(ウェブ発信等)、④人材育成(研修等)に取り組んでいます。

札幌雪学習プロジェクト

札幌市立屯田北小学校 教務主任 朝倉 一民氏
札幌市教委、小学校教諭、市土木センター、市雪対策室、decによる連携体制で、①研究授業の実践、②雪学習メニュー構築と副読本など教材パッケージ制作、③ニュースレター発行など周知・普及、を推進。研究授業実施校拡大など全学的な展開を目指しています。

札幌らしい交通環境学習の取組み

北海道教育大学附属札幌小学校 教諭 河原 秀樹氏
公共交通を賢く使うモビリティマネジメント教育を教諭主体の授業実践や関係機関の連携で実践。これまで全学年で指導案を立案、研究授業は全学年で計28本実施。フォーラムなどによる認知度アップや協働体制の構築、授業用素材データ提供に成果を上げています。

青森県における公共交通出前教室の継続的な実施と新たな展開

dec東北事務所 研究員 関下 和裕
八戸市と弘前市では、地域公共交通会議を中心に公共交通利用促進策が精力的に実施され、小学校への出前教室が継続的に行われています。今後の展開のためには多様化する要望に応えるための体制強化や教育界との積極的なコミュニケーションが必要と考えます。

帯広市における小学校を対象とした交通環境学習の取組み

帯広市商工観光部 主任補 屋仲 総一郎氏
同市はバス交通活性化基本計画策定以降、公共交通活性化に取り組み、2007年度よりバス事業者、BDF製造会社、行政(市、運輸局)が連携し、小学生対象の出前講座を実施。近年は教材パッケージの検討・作成、教材を用いた講座実践の広がりや成果を上げています。

「あたりまえの冬道」から社会資本(みち)を考える取組み

北海道開発局釧路開発建設部 道路整備保全専門官(設計) 小田 晃司氏
身近な社会資本として道路に着目し、2014年度に「みち学習懇談会」が発足。道東地域の小学校教諭を中心に研究授業と意見交換を継続中です。釧路町、釧路市各1校の5年生社会科で北海道開発局における情報ネットワーク活用を内容とした研究授業を実施しました。

学校教育における防災・河川教育への支援の取組みについて

北海道開発局札幌開発建設部河川管理課 事業専門官 山本 重樹氏
石狩市の市教委、小学校教員、関係機関から成る防災教育プロジェクトチーム会議との連携で石狩川下流における防災・河川教育支援に取り組んでいます。5年生社会科5時間を対象に検討し、2017年度は市内3校で試行授業を実施。今後に向け課題を整理しました。

自然災害を「想像し」、「強いまちづくり」を考える授業

札幌市立澄川西小学校 教諭 栗原 聡太郎氏
アクティブラーニングを活用した防災まちづくり・くにづくり学習として「自然災害を防ぐ」の単元で5時間の授業を実践。「防災まちづくり・くにづくり」学習ワークブックを活用し、子どもたちは「強いまちづくり」を具体的に考え、防災意識を養っています。



講評 京都大学レジリエンス実践研究ユニット特任准教授、dec参事 宮川 愛由氏

8つの発表から「継続や発展に向けたポイント」を挙げると、①学校教育で社会基盤を扱うことを促す上位の基本方針や計画の存在、②学校、行政などの協働体制の確立と教員の主体性の尊重、③学習指導要領との整合性に配慮した優れた教材づくり、です。今後さらに新学習指導要領との整合性を図り、地域性や学校の特色を生かした展開を期待します。

ポスターセッション

